

「家で早くアニメを見たい、ゲームをしたい」、「フェイクニュースを受け入れることが「文化」になりつつあるんです。」、「日常を「盛って」ツイートし、いろんな人に「すごいね、すごいね」と言ってもらいたい」、「仮想世界にログインして、仮想キャラの配信や生活している様子を見ることが生きがいになる。」——自分と異なる価値観にビックリ。

僕が見るところ、現在進行している、価値観の変化は、次の3つにまとめられます。

- ①「第一印象至上主義」
- ②「考えるより探す」
- ③「中間はいらない」

これを押さえておくと、現在の出来事を理解し、未来を予測しやすくなります。

①の「第一印象至上主義」というのは、最初に感じた第一印象やその時に起こった感情を絶対視してしまうこと。例えば、誰かのツイートを見てカッとしたら、そのカッとした感情を肯定する情報ばかり集めるようになるんです。

②の「考えるより探す」は、自分で回答を考えるのではなく、大勢の意見から、自分に合った意見を選ぶようになったということです。

③の「中間はいらない」、これが3つの中では重要かもしれません。

超メジャーな人は生き残っています。いなくなったのは、それまでそこそこ食べていた中間のプロです。

例えば、「モンペ」。「モンスターペアレント」と呼ばれる、理不尽な要求を学校に求める親が増えていると言われますが、それも「乱些の表れなのかもしれません。

たいていの技術は、まず研究者が「原理的にはこういうこともできる」と論文などで発表するところから始まります。研究が始まってから10年くらいすると、「何とか実用化できるかも」という取っかかりが見つかることがある。それから10年すると「あとはコストの問題だ」ということになってきて、さらに10年くらいかけて社会に普及してくる、という流れをたどることがほとんどなんです。

極論すれば、もうすでに「ニュースが真実かどうか判断する」ことはたいていの人にとって重要ではなくなっている。フェイクニュースを受け入れることが「文化」になりつつあるんです。

ゲストは、「港区わがまま OL」というツイッカーアカウントでツイートをしている女の子。「今日はこんなランチを食べました」とか、「彼氏とこんなところに行きました」とか、「彼氏じゃない人に家まで送ってもらった。こういう時は、彼氏と会えないからしょうがないわね」とか、キラキラした写真を撮ってアップしているんですが、これが**全部ウソ**なんです。

何の得にもならないのに、どうして彼女はそんなことをするのか？

この女の子は、自分は関西の**田舎の工場で事務員**をしていて、全然キラキラしていない、と言うんです。それでは満足できないから、日常を「盛って」ツイートし、いろんな人に「すごいね、すごいね」と言ってもらいたいんだそうです。

「AI ユーチューバーの住んでいる世界」そのものを提供する娯楽が誕生する、と僕は睨んでいます。いや、もうユーチューバーではないですね。配信プラットフォームとしてユーチューブを使う必要もありませんから。

中世ヨーロッパ風のファンタジー世界だったり、SF チックな未来都市だったり、そんな仮想世界がネット上に構築されている。現実と同じくらいのディテールで描かれた世界の中には、イケメンや美少女キャラ、モンスターが生きています。仮想世界の AI キャラは毎日、ひよっとしたら 1 時間に 1 回、30 分に 1 回といった頻度で自分の番組を配信するんです。

僕らは、仮想世界にログインして、**仮想キャラの配信や生活している様子を見る**ことが生きがいになる。そんな美しくてドキドキする世界に比べたら、現実なんて「出来の悪いサブ世界」の 1 つにすぎません。

でも例えば、『天空の城ラピュタ』の地上波放映が今でも視聴率を取れるのは、コンテンツの内容そのものというより、みんなと一緒に「**バルス!**」とツイートしたいからではないでしょうか？

~~~~~

バルスとはラピュタ崩壊の呪文である。

「バルス!」——ご存知、ジブリ映画の名作『天空の城ラピュタ』でクライマックスに主人公たちが叫ぶこの呪文。日本ではテレビ放送中にタイミングを合わせてツイッターで同時につぶやく「バルス現象」がいまや定着しつつある。テレビを見て視聴者が同時につぶやくというこの行動に、2011 年放送の際は Twitter 社のエンジニアから「サイバー攻撃が起こったのでは？」と騒ぎが起こったという。

~~~~~

僕たち

は、天皇の持つ象徴性を無意識に正しく捉えている。「災害や悲惨な事件に天皇は心を痛めている」、「天皇に文句を言ってもしょうがない」ということをちゃんとわかっているんです。そして、天皇も**政権を批判**したりはしません。

ネット通販のアリバ

バは、「芝麻信用」（ジーマーシンヨン、英語ではセサミ・クレジット）という決済のプラットフォームを持っており、支払い状況や学歴、職歴、資産などの個人情報が記録されています。芝麻信用の信用スコアが高いほど、安い金利でお金を借りられたり、自転車レンタルなどのサービス利用時のデポジットが不要になったり、いろんな特典を受けられるようになります。一方、信用スコアが低いと、自転車のレンタルも断られたりする。ネットの記事などを読むと、中国人は芝麻信用の信用スコアにあまり拒否感はないようですね。

「女の子に興味がないわけじゃない」とか「中学生の頃に片思いした相手が忘れられない」とか、いろんなパターンの人がいましたが、まとめてみると8割くらいの方は、「すごく魅力的な相手だったら本気で好きになれるけど、それほど魅力的と思えない相手と付き合うのはお金や時間の無駄」ということを語っていたんです。彼氏／彼女は欲しいけど、恋愛は「コスパが悪い」んです。

「家で早くアニメを見たい、ゲームをしたいから、仕事をちゃっちゃと片付けてさっさと帰る」のはごく普通でしょ？

僕は、「あらゆる文化は、リアルからの逃避であり、洒落化、相対化である」と考えています。

僕は自分が中学生、高校生だったからよく覚えていますが、『巨人の星』とはまるで逆でした。「受験戦争」という言葉はもう使われていたし、星一徹みたいな父親はどこにもいません。誰もスポーツに根性を求めなくなっていました。今はもうない、過去の価値観、美德を賞賛したからこそ、『巨人の星』は熱狂的に支持されたのです。

欧米の映像主義の作家が、「手の平に釘を打つ」なんてシーンを見せた場合、それはすべてステイグマ（聖痕）のメタファーと考えていい。

~~~~~

• **stigma**

【名】

1. 汚名、汚点、汚れ、染みとなるもの、不名誉(の印)、恥辱(の印)
2. [罪人などの体に押された]焼き印、烙印

~~~~~

10年後、恋愛はノスタルジーになり、リアルに恋愛しようという人は一部の物好きになる。それが僕の予測ですが、結婚や育児などに関する社会の価値観もがらりと変わっていく

でしょう。

『生活保護の謎』（武田知弘著、祥伝社、2012年）には、興味深いデータが掲載されていました。東京の千代田区に住んでいる、小学生、中学生の子供二人がいる夫婦が生活保護を受ける場合、**支給額は月に約30万円、東京以外の地域でも月に27、28万円**。生活保護を受けていると社会保険料も払わなくてよいですから、税込みで甲36万円の収入がある世帯と同等の暮らしができるということです。

そして、出てきた提言が「40代一人暮らしを減らせば日本がよくなる」というもの。

これがネットを中心に炎上しました。中でも多かったのが、「そんなのは因果関係じゃなくて、ただの**疑似相関**だろう！」という指摘です。